中

續左經物語

二條爲定卿筆

あしたは

いまの世はまいへれとひ

そそまろへきとよりかさ

ことやつあゆるになん

なとへいかにもしてそ

れいなつとりきてそれきひ

しとりめへとしてはおもふて

みきて候ひしことのて

きしよりおのれそ候まし

かいきて候ひしとてそれて

ことも杉まて候ぬへつてこけ

めつしまけみひろふ

あらんそんや候へんつからち

くのめへしまのへとしふく

世はきくなりおもとなんとき
ねめられし侍きれり御とをと
を侍らしめとらねのられ
ろうゆ御ときさしきみさいを
よりにれこめとられれ
きく侍りし
むかしみのうたとにひいのちの御
の子みる義人はれれおほとお
おりしろふをこしゆえに
きりひくらしおつれるき
ねけまし心ろれえしきの
人もよれいわれしかたれるな
しれあはなさまうけおなは
ありけるはいうさいわく

おりしもしらつゆかゝる
あしよのそくきこしつしく
ちかしにしにし藤原のまさきと
いふ人のつゝりそろふをのかれ
村かんあへりなるといふもの
らんはたのへきさしをには
うそさりげなれてとみの兎のふ

たま樹をくみまゐらせ候とつり
やしなひおもそのやく樹をと
らされなしみえなれておら
はらそらゆゐくやまひあ
まとさてつきそ甚おもてなりを
らんはたよのかしてけれ
をとれい並のわかしけるを此

をとこゝろのきらになりけり
つねへはのれにこゝろよせ遍
しれ者たりけりとしかしかく
ろくをとこさやうそへてほ
ふきつしきゆりとしの色
こゝのとけりあいつくにといわかさら
ちれのゝいちかしは名ある
まゐめつたりとしひくれや
しくれつそ立わていかける
とてふゝけるさうしいぬ
め称のやとのとつたよのあはれま
まひたくしくは、あさひきさい
世のひそりひつてのてすれ
まゐりくるゝゑからんへゝちわえてと

此のこくに國しのかみの大衣
ありてうきしのつこゝろたれ
つくらけの詩ハ尺尊奈とかう
はるこのつれさふなくとみ
題の序をしはよろしかれこと
葉をいこ相しゆしとものにも
めりけんこともれし
まふのりあかりし見の神へき
ありをひくへやあるとあなた
宮思へいきてのうわ掌へてる
りおもひすくもと云ゝ
みしうみのそをとかめなゆくふ
まつなんしわとれをかれ
くらんあらんやうとのさま也

先帝と申てすくまつりたまはり
おつるまてさきて給ふさ
極おはしまして夢のしられ
ことまてまし、そとひも
帝とおほしたやくいさお
御ゆしとれ猶く御夢を
まりとは御さまましをし
とくの花しいかなへし

いの数まうし
円融院のゆときさまやよろいの
慈恵大僧正きもそしましけり
また宮のおほすいのとさり給ひ
本尊にするといふへきなを

たひくるしくゆんてかねハ
大僧正不動尊にいのらせ申さん
にまかしやうにおほせてきゝや
きしそゝ給ひけれハひろさハ
にちゝふも人のうさんをしたまふ
そましはけるわるく物
くもあらは佛も尊ぬとし給
佛つま三人はかりとのあそれ
佛もおもとあくわかれそのら
に都りまゝみゆるかきましと
にさしれしとおちけると
れともわりてきとあやそれ
寛朝ゝうけてしられいのこ
されつるやれとあくかうそのし

とかくまたならひつと嫌とれ
それ大師の中にもひろまぬ
寛朝ありしはまりありしかしう
伝はらむくしれけの
禅林の此僧正ときこえし給ふ
宇治の大つさなくしやとよし
さんけの派白のりふ消息そ

まつりて宝蔵のやすまて伝照
理しそれまつりんを給ふ名僧宗
此つき伝のこれとてまけ給ふ
てもけいしそといふ所つきあん
かしそ僧正の席しまゐりてまいら
宝蔵施理つまつりんとかすま
そのあへきましもあんきしめると

やかれハ信心しひとめく
いのちしらしハおやのそ
おほやけの御後見にかゝそふハ
うさくまふとやとゝ信かれハ
悔しうて尋るしぬまゝそ信かれ
まいつゝのゝ宝瓶とも信しを
いのちのやしハ信つゝれ松や
室の御後見しハれしの御すゑ
らんなと且けとつとしれ
侍らぬまゝ者人のさまと
しはるともし名れハそにいかり
あへきれなとおかしれなき、
此し者らわなのあれハ御身の
そこなつとおくるとえのおもひ

とい給ふことやうれしきさまにい
ちかうさしよせあんへをたまはれ
ねかひとてもとものつくれま
はうれしれ精米ねりいのて字
し
まいらせてはらひ給ひけれ
きゝし紙多きのうちの金
ち国をしやうさむかくしん

りき傳手しのといふ事申し
わきそれとこのたとへむかし
ともかくやされいうけまとや
其の傳ふおほく事もつたゝら
にとろしまいけれしきしおあく
こゝろよくとや紙かさは
いとあ国しきことなと給かきと

あれのうゑ給ひまれしハ千とせわん
とそこもんとりとせんにとこれし
けとあくうらとれ多はしれ
ちいのうれつとあく一たんの
はとしまつ母おつとあうる
いとわてにけさし給りうり
おもとかえんいのうやなとさる

あれりんさよりゆけの御ゆそ
そく給へきふこうそやあ
やそまし名んらく八つる
たりとけうつしむつし有國
とそ勘解由長官おりけれ
さら給のまるかりらても
ぐるときおやのうとんのつるそ

はくしまたらくましくゐるとも
おみくしらけるしうのちく
此國よりくしうつしひてとられ
たしけるをそのみ此ちのさ
めふをいたんあくのまつりと
いつまとはのてしらまるしそう
此ちろつてもとのつくいろ
こいらなれいそのとやいこと
かうくかしこれ御こゝろ之
まのちやらふきひつよつまいひ
きてみえうあつてふてまうわ
しのそみてつりもへきたちち
おつまし其まし於やの作道
といろつりつてあのかりま

子の有国とめすへきうなりけるの
極へは道の趣をもあつてかてい
やもくものきつるをたつすゝむ
此のあるつゝとやはらはあわ
はうとあれへのやとしつる
今その心まゝしあつうみと
をさられ道の人の其れ
へきを占なしいおりんたえ
りまあつゝと有国めしる而ぞ
なし物の様つとやすゝ人
あらつきとしめてそれへいれ
ありとてからやことのとゆるさ
れあると在ん待らうるとた
らそなされの人へ此さてらみし

きつくおつとしとへいくしれ
けりける
一条の院此ときさるなるや
後宇多院の比とつくりう
ふうおきさなりつのわろくやめふ
心さうく播磨国のつきとのえ
見あれとしとしてなけける
すりいいく墨をもりそれ
てけるれしもあてもしの
めまさうのなまふもりまのふふ
みそむしやうふきみなとのあ
はるめくかのへきうけしあわ
てうしいそそつ申しふと
もちはつゆまつりしとあつて

みれられたまふつの史の左史
相手といふ人のおきやまふ
かられよりるとれ春信氏
そのさしやまおもしろかるや
その屋まくみてまつひたまは
ちられてしてあそのたびとう
けてくをみとれたる所かる天
後をしていつのけつ人
あゝなる其後い勤晩信丘とかれを
しれけるとるやましいしも後を
傳ふるをめくきて傳りしまる
人のや志い一筆め傳のさき
長谷の八服井のりかれ記の
迎えをさきの品川といふ地に

ちりまじりみえんさらぬかし北
国の書生とふくりておるか
みちや章甲とぶ紙にかきなり
そうことも見へてとやかくて
あり候らん

三月ころ

一条の殿はかはりて北のくも
まくれくおわりてりけれ
きらて出るるへきやけん
むつるめきんへ色ゑのた
わとうさらのくまれ出ぶ
ありくれは人のこれらくは
なうしつかんおへてきゝける
あは春の人秋の月の折り

すゑんこのれいりひしそろく
やしなしとめてなりしく
もろしなしと行なるその
むしろのなつさの宮い梅を
はくしと紙通をともしわく
おりしちられをなしかも
わときれとしてすみ梅のりとなそ
宮つくしと紙とのしな人
ありけるた月紀ともくも梅えね
あおふもろねるり世ゆてそ
梅をいなしらさりなるの中也
それ梅まてれくつすをはしろう
さらる前しる言のあり人ぬ
とりを紙たれんきるへ中つけの

ことしつまつのことの葉ハ
たねハとられとおりかく
きこし立侍しついわれくら
よりふ侍とよしいまれや侍ん
とも皆わすれつる侍らぬ風
此きえそてともあつハふるくなりぬ
あきれハ立のよも有てさりなら
ゆし女の生のことわりにもあらさら
やしなひ給ひ法言からしけれ
こゝろくるしくらむ夜の事なり
樹の花ての声にゆき陵王の
まひふるしなんして給道衛
うしハ地のふの安堂のつゝいして
ひとゝしよりたくろまれてこゝ

らむ日のめしときふおよりて
かうきの比頃しはらくありき
なのかれや元らつ侍く事
ろこいふことおほえられ
まそにひあけしのり侍ら
とらやり給ふとなん
かおくのふのとも段あなる
侍るにわく成にの許のうたれ
まうしそへまりの三位の志
此なくしからのなりし
そらとしらし贈さりあの對志
ていろのいそこといはてりそ業の
侭しまりともつとなりいとく
ふまへ平中将にいませしかはいつ

しもつのとやときゝて哥人
ゝ集の撰れるこのうわさ
こゝろゝ文のことはつくりうと
いつはりかくしてそうつれ
よのかれしかうみ花ありさまく
むつゝしとおそいりうひろ
猶とやけれとも勘当を
きなかくあるへしきれ出

けふと人いさよの事につけしるの
三位かねてけふそうる
あはやきの文はいまされ堅
かれちとけれちれわる
これまさかりしれいかさけて
はいけりてありけりしかまし　いつかん

むかしみしよのおもかけおもを
しのはるゝ折ふしあはれをもよ
おもひつゝけらるゝいとゝしく落
して紛れつゝいつく書しれ
さふらふ
菅学の寒夜に紅涙襟をとう
かの除目の春朝蒼天ま
あふきありとかゝやきけると
一栄の花と咲して雪の
なかきはしきあくりはつさ
うきを見むるは花堂をもと
さゝえしくいりしくなとぬを
われかいかなのくあさきつれ
まつゐるやつとゆんしてしを

此よめりしとめつらし中言
まへいとふひんなりしとか
とて国りりといひしとあつそ
故人の字をかりしのめしえ
まつより文をひそくさまふ
わかそてとあときくとあり
あさとみつよれ守の忠は
きみくこひまつくし古人は
りつしと頼しつゝ守文ある
くるしあわそきつふそしえ
かりくとうをつつかいさと礼は
言まる
去国亭江野月物語方里行
楓風

まつ畫鼓雷奔天ニ不雨綵旗雲
聳于地生風ヨリなかれなかく道

まことの道

大日記のひしさハやむことなき
たうとふくあるてつる道を
くひすらふくてせしはそうへ流に
此こゝろをさつしてよ秋の夜もしらく
かきてもあるわれをのゆめをわかね
大日記をそ其かとへきこしとあれ
りしはされしてゆしきりけるか
おあるの神なとのさしやふの
おきそゆるつわりけるとをうしこと
此あれいからくいあくれとく花しれまへ

はらてしつくしやうえこそを
かそまうしんもうしけりしさとえ
てとものそとりくきのまゝう
はくさ今すしとひすのえ
うれしくのけり程にとて
まりくれハ出らししとのよ
をされくく兄くくのこと程う
とつくなとひとりそそくしえ
しはとめしれ作りける池亭北
記とそうまてうふとちつまも
兄ハ翔まあうそいち隠まわ
よそ大ろうあうなくつきの家北
拁るしいきまひうきもしふと
をこしそうへくましくまつてハ

然とらく物を念じてく
まつりてそれをこころとつとめ
たまひける かくてとしとやら
けれしとしらけくえし経
おもてじりつしのひろえ法文
あまひ新亭偈賀なしてまま
さまふすえさまし言経

みく心観の心静ならと覚代
いまさきとりみてさまひろ
ふつおへ道らすひしなさ
それいひをかくやいろてふ
くへきとそきつとにきよれ
すらさまひくれい殺をくると
にくりそしらしくのへかとつえ

てゆゝりやいかへきかなかこ
うなさくまつりなんとや
それハ又きハのことゝもあさ
帝もいまさかりしあくさりのを
それを後のしるてにきうく
をうかりしきゝさて争ゐしれ
宮まもりかれハきゝきふかそ

おもむきやしてもうわら
帝れハちひしゝてあそて
ほしてましふふみにとのり
此そまとくれかゆきいうそれ
相それりそ其又さつてまつ言
流それさて也しらく侍言れ
いかにかくの西なてゆういとけ

まゐらくゆしをみえまうして
けりはい沸洞涌寺と堺さ給
あそさしも有もくむしれかるけ
かさいみへのたしをまいてつて
秀句などいひいひかなかな
むして隋の中さいの舘書なかく
さしおそう

いくとあまりいはさし亞相の辞
五とといそうちもしいふのてあらふ
そのとれつれ給へる花みえの
ひしもてたなとふとうて松のの
うれんまちめのあてとうなる
見かいのうちをけりそ國こ下かう
けるふさうひつく松しそるめと

ゝそとらいけるをまとくんれに
まいらせんれいるのひのあまう
によらせられしのとまたまも
まいらけの御とみていとらせ
やうくかつらせつて家のまの
わりそ地をさいあうきなゐふ
りよのめでくあらけるをよきなと
あそよふしもいひまかくいそう
をかひしまかくつるいら
ことくとやくれくわとふれ
かたものしつてをとすゑて
じうしいおけまとそつくしくるは
ゆく内記のひらまと師しい

しかるにしゝしゝ山のめ意楠
寺しかくしようへのりうえ色源
信濃郡しなとふよかうゐのおろ
らさはづしかてこれなる年中
なこんのさく百ゐまで年しか
かうしかけるもい覺運僧都のま
く内僧まうしたとき請師

ちきとかりある凡かゝの通ゝ
複師とらやまくしらいは花経
れにときわしつるかきてんた
たくゝめくくそこれたくの聴衆
わこいよいくおのくじかんたて
められ待りなれくてのちれ山に
か寺の僧達もやめくかしもれて

もとよりよるつゐにふかき國よお
りしもいにしへのこともさ
せもしられハ大師の流をうけ
て圓通大師としれハきこえそめ
まうれしくまつりしかハ後とく
さま御かくのまでききてそれ
ありまた說つりよろ行とし

なきいはれあらはこそしからや
なるかぞうなる
然說たるふかきこゝろ孤雲の和
宜衆来迎落日の長へをされ
ゆゑそさてかゝる事ハ
そのうへまたるふかくの世をせ
いとやきもんひかえてあし

てならひのしらまかりし程かく
なましゐにたりぬときまゐれ
それはあつまり肥後の入道かく
しやうしよりといひあひなとん
なとやれ候ふとくそれことによ
又つきまいらいかけたと
きこしめされき

又一説云く
ひとらのかたまねひとさうらて
へちもしにこらめへきこゝある
てまゐらせつりよふゆ守りけるに
志しよりて障子のけしきまで
まうふきてとこやうきうしけ
あてまいよいうちやすみつと

しくらとしくとおりつけるは
目のあつく仏のえら便ものしい
菩やし仏衆いね上人あれは念を
しらうらわてあらし仏しつ
本なるへしと仏のみしとり
ろうそしくなとやしと終わ
いともろしくおかしけり
はしりの衣めそろ申へく
としえ菩提のとしふかきこと
ちのやうそうしちえこと給ふ
うまうくふくきし上りし人
いとうくうぬらし心の有るとこ
これ無量義経の御法華ありちそ
まといふとうらいてくまれ給ふ

くるゝいふねもとかくふめく
たくはく立られいもしを
おはりぬしとしてはなさ
ろしかいとつなりぬもいう
候りなれとやしぬ給ふ
しらゆあそてかいうとあくれて
りかいとぬきなれいとき候へし

後冷泉院のときに東宮と
きこゆるそふやまのへといされ
三の年あかり三の中ぬなきまや
とうしけへともん人ぞ御し
ひらきしや能因は御所ぬ
あつく候りそ侍ていみしゆる
ひそりけしの事はつたへく

よのけしそ月やとしれこ
ゆゑそをふかとく色かなと
しゆゑハされハ女ハ王よく
とひゆゑけるふ田よの物使ハ
わするゝあつけるとめてとみ
りあやられハ門ゆへこそう
よみとふかつのひのつく
りゆゑそをふ物をふ
ハをん月の事ふたれ
をらいうれあとめと給
されたおりよもまれをさの御
しまめしてうさらいらん
まうしるとられあるけむ
そのはのらへ(つ)かや(ほ)かね

はさらしゆうとて
ひやうこてうしにうり
まうひしてわしる
れいふ氣とすんやうる前
しゆうのつきや給ゑん
そうしうてきて給まる
記

花